

『古英語版七書』(Old English Heptateuch) における V2語順とパラタクシス (parataxis) 文体

小 林 茂 之

0 はじめに

聖書の初期の英語訳として、ウイクリフ派の聖書 (Wycliffite Bible) が有名であるが、11世紀の後期古英語の時代に古英語に翻訳された聖書が残っている。『ウエストサクソン福音書』と『古英語版旧約聖書 (七書)』(Old English Heptateuch) である。前者の著者は不明であるが、後者は『説教集』(Homilies) で有名なアルフリッチ (Ælfrich) が11世紀に書いている。

『古英語版旧約聖書 (七書)』の写本の一つであるケンブリッジ大学図書館蔵の写本 (MS. Cambridge University Library, li, 1. 33) は、大英図書館蔵の標準テキストとされている写本 (MS. British Library, Cotton Claudius B. IV) とは異なる本文を持っている。この写本は、言語資料的価値の観点からは書写年代が古い標準テキストとされる写本以上に重要である。この写本の書写年代は、ちょうど古英語から中英語への過渡期に当たる12世紀であるので、ノルマン人による征服後に起きた急激な英語の変化を反映していると考えられるからである。

本稿では、ケンブリッジ大学図書館蔵『古英語版七書』では、SV語順が優勢であり、初期中英語における変化が反映されていると主張し、等位接続詞 and で始まるSV語順は真のV2語順ではなく、parataxis 的文体の残存であると論じることによって、そのような語順は、同写本の語順が基本的に大英図書館蔵の写本よりも英語史的に新しいという分析を支持するもので、SV語順であると主張する。

1 ケンブリッジ大学図書館蔵『古英語版旧約聖書（七書）』

1.1 『古英語版旧約聖書（七書）』の写本

ケンブリッジ大学図書館所蔵の『古英語版旧約聖書（七書）』の写本は、MS. Cambridge University Library, li, 1. 33 の中に含まれている。この写本は、1574年にケンブリッジ大学コーパスクリスティコレッジ（Corpus Christi College）学寮長を兼ねていた大主教パーカー（Matthew Parker）がケンブリッジ大学に寄贈したものである。同大学の写本カタログでは、以下のように記載されている。

- (1) A quarto, on vellum, 450 pages of 24 lines each, handwriting Normanno-Saxon, and ascribable to the early part of the xii century.
HOMILIES, PASSIONS OF SAINTS, AND OTHER SACRED PIECES, in Anglo-Saxon.

1. The Twenty-four Chapters of Ælfric's translation of Genesis (pp. 4–44)

The text, though somewhat modernized, is substantially the same as that printed in the Heptateuch, ed. Thwaites, Oxf. 1698. Ælfric's dedicatory letter to the ealdorman Æthelweard is prefixed.

上の記述の要点は、「12世紀初めのノルマン系の写字生による写本で、その最初の4–44ページに『七書』が置かれている。実質的に1698年に印刷された『七書』と同じだが、いくらか当代化されている」ということである。2以下では、この写本を同書の標準的なテキストとされているCrawford (1922)にしたがって、C写本と略記する。

『古英語版七書』の現代のテキスト（Crawford 1922）は、大英図書館蔵の写本（MS. British Museum, Cotton, Claudius B. IV）とオックスフォード大学ボドリアン図書館蔵の写本（MS. Bodleian, Laud Misc. 509）を底本としている。以下では、上と同様に、これらの写本をそれぞれB写本、L写本と略記する。

つまり、ケンブリッジ大学図書館蔵の C 写本は、アルフリッチ (Ælfric) が原本を書いた時代から約 1 世紀後の 12 世紀に作成されたので、B 写本や L 写本が、原本が書かれた時代により近い時代に書写されたと考えられている。

Crawford (1922) は、C 写本が他の二つの写本と全く異なる本文を持っている箇所を示している。以下に結論だけを引用する。

(2)

(1) Preface to Genesis, Gen. caps. i.–iii., vi.–ix. . xii.–xxii. 19

=Text identical with that of B and L

(2) Gen. iv.–v., x.–xi. = Completely new text.

(3) Gen. xxiii.–xxiv. =Text where C and B L are interdependent.

(Crawford 1922: 425)

Crawford (1922) は、異本間の関係について考察しているが、本稿は言語的違いに論点を絞ることにする。

1.2 B 写本との異同

1.2.1 異同の概観

Crawford (1922: 425) の (2) にあげられた部分から 1 箇所をサンプルとして、異同を示すことにする。以下に、Genesis CAP. IV の冒頭の文をグロス (gloss) とともに示す。

(3) MS. B Soðlice Adam gestynde Cain be Euan his gemæccan, 7 ðus cwæð :
truly Adam begot Cain through Eve his spouse and thus said
Disne man me sealed Drihten
this person to me gave the Lord

MS. C Adam soðlice æfter þisum breac his wiues, 7 heo eacnode 7
Adan truly after this violated his wife and she conceived and
acende Cāin, 7 cwæð : Ic æfde mannan þurh God.
gave birth to Cain and said I had man through God

(Crawford 1922: 91)

Gen 4: 1 Adam vero cognovit Havam uxorem suam quae concepit et peperit Cain dicens possedi hominem per Dominum (Vulgate)

Crawford (1922: 437) で指摘された語彙的な対立は、この箇所でも確認される。「神」を表す語が、B 写本では *Drihten*, C 写本では *God* となっている。

C 写本が、全般的には B 写本よりもラテン語聖書に忠実であることがグロスから理解されると思われる。たとえば、B 写本における前半部分では、‘Adam gestynde Cain be Euan his gemæccan’ の文意はラテン語聖書とかなり異なっており、後半部分の ‘Disne man me sealed Drihten’ では、語順の違いは無視するとしても、ラテン語聖書とは逆に主語が *Drihten* になっている。

次にあげる Genesis CAP. IV 2 も同様である。

(4) M.S. B Eft he gestrynde Abel.
again he begot Abel

M.S. C Eft heo acende his broðor Abæl.
again she gave birth to his brother Abel

Gen 4: 2 rursusque peperit fratrem eius Abel (fuit autem Abel pastor ovium et Cain agricola) (Vulgate)

ラテン語聖書では、前節からの文脈上から *peperit* の主語はイヴと解釈されるので、C 写本が B 写本よりもラテン語聖書により忠実である。

1. 2. 2 語彙

Crawford (1922: 437) で指摘された語彙的な対立を以下に引用する。

(5) MS. C prefers god where MSS. L and B have *drihten*.
gea ” ” ” winter.
gereord ” ” ” *spræc*.

(Crawford 1922: 437, § 49.)

drihten は本来、「主」(the Lord) を意味する。gear は現代英語で year である。アングロサクソンの文化では、winter が「冬」の他に「年」を表した。

spræc は、現代英語では speech である。現代ドイツ語 Sprache と同語源である。

1.3 語順

B 写本と C 写本とを比較し、ラテン語聖書 (Vulgate) の該当箇所をあげる。次は、Genesis CAP. IV 3 である。

- (6) MS. B 3 *Ða wæs hit geworden æfter manegum dagum ðæt Cain brohte*
then was it became after many days that Cain brought
Drihtne lac of eorðan tilingnum
to the Lord offering from earth gain
- MS. C 3 *Hit wæs þa æfter manegum dagum þæt Cain ofrode Gode lac of*
it was then after many days that Cain offered God offering from
þare eorþan wæstmum.
the earth's fruits
- Gen 4: 3 *factum est autem post multos dies ut offerret Cain de fructibus*
terrae munera Domino (Vulgate)

B 写本の冒頭、‘*Ða wæs hit geworden ...*’では、第一要素は副詞であるので、V2 語順である。他方、C 写本の対応部分は、‘*Hit wæs þa ...*’であるので、SV 語順と解釈することが可能である。

次に、続く Genesis CAP. IV 4 の校異を比較する。

- (7) MS. B 4 *Abel brohte to lace ða frumcennedan of his heorde.*
Abel brought to offering the firstborn of his herd
Ða beseah Drihten to Abele 7 to his lacum,
then looked the Lord to Abel and to his offering
- MS. C 4 *7 Abel ofrode of þam frumcænnedum sceapum his heowodum*
and Abel offered of (gen.) the firstborn sheep his herd
7 of his fætnesse. Þa beseah God to Abele 7 to his lacum,
and from its fat then looked God to Abel and to his offering
- Gen 4: 4 *Abel quoque obtulit de primogenitis gregis sui et de adipibus*

eorum et respexit Dominus ad Abel et ad munera eius
(Vulgate)

C 写本の 'ofrode of þam frumcænnedum sceapum his heowodum' 中の of を部分属格の代わりに用いられた「of-構造」であるとみると（小野・中尾 1980: 290–291），構文的には目的語が動詞の直後に続いているので，C 写本の言語は B 写本によりも近代英語に近づいている。⁽¹⁾

次に，続く Genesis CAP. IV 8–10 の最初の文を比較する．

- (8) MS. B 8. *Ða cwæð Cain to Abele his breðer : ...*
then said Cain to Abel his brother
MS. C 8. *Cain cwæð þa to Abel his broþer : ...*
Cain said then to Abel his brother
Gen 4: 8 *dixitque Cain ad Abel fratrem ... (Vulgate)*
- (9) MS. B 9. *Ða cwæð Drihten to Caine : ...*
then said the Lord to Cain
MS. C 9. *Cain cwæð þa to Cain : ...*
Cain said then to Cain
Gen 4: 9 *et ait Dominus ad Cain ... (Vulgate)*
- MS. B 10. *Ða cwæð Drihten to Caine : ...*
then said the Lord to Cain
MS. C 10. *God cwæð to him : ...*
God said to him
Gen 4: 10 *dixitque ad eum ... (Vulgate)*

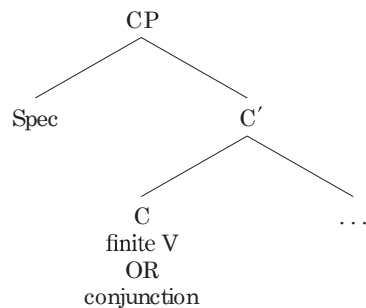
上の例を比較すると，B 写本では，副詞 *ða* が文頭の位置にあり，典型的な V2 構文であるのに対して，主語 Cain (4: 8–9)，God (4: 10) が文頭の位置にある．この箇所では，C 写本の語順が近代英語に B 写本よりも近いことは明らかである．

2 Parataxis 文体

従属節による複文構造に対して、単文を並列する文体は、parataxis（並列）と呼ばれる。狭義では、文・節が接続詞なしに並べられることを指すが、Mitchel & Robinson (2007: 100, § 183) による分類によれば、接続詞が使用される場合も含まれる。⁽²⁾

ただし、Mitchel & Robinson (2007: 100, § 182) は、一般に等位接続詞とされる *ond* (*and*), *ac* は従属節 S...V 語順を導くので、等位接続とするのは適切でないと述べている。しかし、van Kemenade & Los (2006) のように、従属節中の接続詞が CP 主要部を占めることによって、V2 語順を妨げているとみられるので、等位接続を構成するかどうかは統語的な原因によるのであって、機能的な原因によるものではない。van Kemenade & Los (2006) は、以下のように従属節の統語構造を示している。

(10)



(van Kemenade & Los 2006, (8))

(10) では、接続詞 (*conjunction*) が C 位置にある場合には、時制を持った動詞は C 位置に移動することができないのである。

この場合とは対照的に、本稿の以下の部分では、*and* が文頭に来る場合、V2 語順とみなすことができることを論じる。

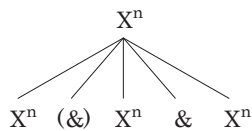
3 等位構造

Wilder (1994) によれば, 等位構造 (coordination structure) は, Xバー理論以前の標準的な分析では以下の通りである.

- (11) a. Conjuncts can be of any category
b. Conjuncts are of same syntactic category (Like-and-Like).
c. The node dominating the conjuncts is a projection of every conjunct
each conjunct is head of the coordination, conjunctions are non-heads.
(Wilder 1994, (9))

統語構造を簡単に述べれば, 等位接続詞は主部 (head) にはならず, 全体も以下に示すように, 主部を欠く構造となる.

(12)



(Wilder 1994, (9))

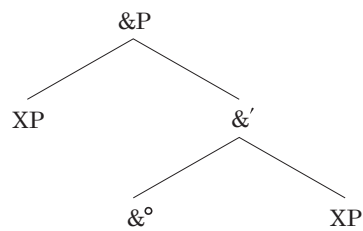
Wilder (1994) は, 以上のような Xバー理論以前の標準的な分析に対して, 等位構造も Xバー理論における句構造に従っているという分析を行った. その分析によれば, 等位構造も以下のように句構造における最大投射を構成する.

- (13) Conjuncts are maximal projections

(Wilder 1994, (92))

つまり、等位構造にも主部があり、等位接続詞 (conjunction) が主部となる。構造を以下に示す。

(14)

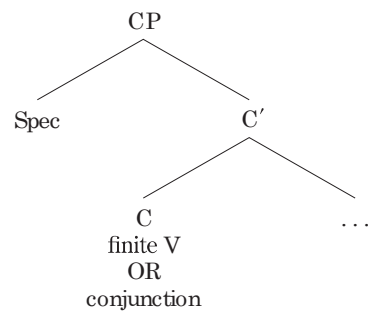


(wilder 1994, (93))⁽³⁾

(14) では、&° が主部であり、等位接続詞である。また、指定部 XP は空であってもよいので、and を先頭とする主節が相当する。

問題としてきた初期英語の and を先頭とする構文の分析に進むことにする。2 節で、従属節の and に構文についての van Kemenade & Los (2006) の分析を示した。

(15)



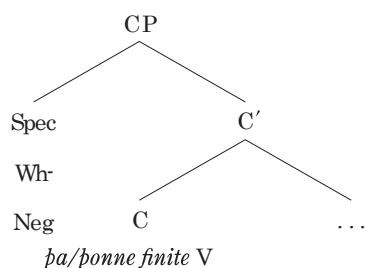
(= (10))

(15) では、CP 主部にあるので、V がそこに移動することを妨げるので、従

属節は V2 構文にはならない。

他方, *and* が主節の先頭にある場合, van Kemenade & Los (2006) によれば, 以下の構造をとると分析されている。

(16)



(van Kemenade & Los 2006, (3))

and が先頭で, 定形動詞が続く構文で, 定形動詞 *V* が *C* 位置にあり, *and* が *CP* 指定部にあると分析することが適切であれば, この構造に当てはまり, V2 構文とみなすことができる。

CP 指定部は最大投射であるが, *and* は *&P* 主部として最大投射をとると分析される。なお, *&P* 指定部は先行文脈に相当し, 空となる。また, *&P* 補部も空であるが, これは *TP* に残留し, 主部 *T* にある定形動詞だけが全体の *CP* 構造の主部 *C* に移動したと分析できる。⁽⁴⁾ 以上の分析から, *and* を先頭とする V2 構文を暫定的に認めることにする。

4 語順

4.1 V2 語順

V2 語順は, 現代ドイツ語の主節のように, 定形動詞が文の第二要素になる語順である。語順の分析の導入として, V2 語順の標準的分析を紹介しておく。ドイツ語の主節は以下のような語順をとる。

- (17) a. Ich las schon letztes Jahr diesen Roman.
I read already last year this novel
b. Diesen Roman las ich schon letztes Jahr.
this novel read I already last year
c. Schon letztes Jahr las ich diesen Roman.
already last year read I this book
'I read this novel last year already'
d. *Schon letztes Jahr ich las diesen Roman.

(Roberts 2007: 50, (56))

(17) で示されるように、第一要素は、XP（最大投射）である。また、補文化子（complementizer, 接続詞）に導かれる従属節では、以下のように、定形動詞は文末位置をとる。

- (18) Du weißt wohl,
You know well
a. ... daß ich schon letztes Jahr diesen Roman las.
... that I already last year this novel read
b. ... daß ich schon letztes Jahr diesen Roman gelesen habe.
... that I already last year this book read have
(19) Ich frage mich,
I ask myself
a. ... ob ich schon letztes Jahr diesen Roman las.
... if I already last year this book read
b. ... ob ich schon letztes Jahr diesen Roman gelesen habe.
... if I already last year this book read have

(Roberts 2007: 50, (59), (60))

(18), (19) のように、補文化子に導かれる補文（従属節）では、定形動詞、または助動詞は文末位置をとる。daß や ob は TP より上位の CP の主要部 C の位置を取るの、全体の構造は以下のようなになる。

(20) [CP ob/ daß [TP ich schon letztes Jahr diesen Roman las]]

(Roberts 2007: 50, (61))

そして、主節では補文化子は現れないので、定形動詞がCの位置に移動するという分析が一般に受け入れられている。さらに、Cの前のCP指定部と呼ばれる位置に、第一要素となるXPが移動する。⁽⁵⁾

4.2 VS語順

VS語順は、V1でも起こるが、少数例であり、多くはV2語順において、第一構成素が主語名詞句でない場合に起こる。

(21) *Wæs þa an gereord on eorþan, 7 heora ealre an spræc.* (Gen. 11.1, MS. C)

(22) *Ða cwæð Drihten to Caine: Ne bið hit na swa, ...* (Gen. 4. 15, MS. B)

(21) は、章の冒頭であり、V1語順の用法として古英語説教文体のテキストにみられるものである。⁽⁶⁾ (22) は、典型的な語順V2である。本稿におけるVS語順は主にV2語順を表す。

ただし、古英語は、元来、厳密なV2言語とは異なって、主語が代名詞である場合、SV語順を示す。⁽⁷⁾

(23) *Æfter ðam he gestrynde suna 7 dohtra.* (Gen. 5. 10, MS. B)

(23) の *he* を数えると、動詞は第3番目の位置になる。このような古・中英語の主語の代名詞形は、接辞 (subject clitic) として扱うことが論じられている。⁽⁸⁾ その場合、(23) はV2に含まれる。そこで、本稿では、VS語順を限定した意味で用いることにする。

4.3 VS語順／SV語順

Genesis 4. 8–10 の最初の文を比較する.

- (24) MS. B 8: *Ða cwæð Cain to Abele his breðer : ...*
then said Cain to Abel his brother
MS. C 8: *Cain cwæð þa to Abel his broþer : ...*
Cain said then to Abel his brother
Latin: *dixitque Cain ad Abel fratrem ... (Vulgate)*
- (25) MS. B 9: *Ða cwæð Drihten to Caine : ...*
then said the Lord to Cain
MS. C 9: *Cain cwæð þa to Cain : ...*
Cain said then to Cain
Latin: *et ait Dominus ad Cain ... (Vulgate)*
- (26) MS. B 10: *Ða cwæð Drihten to Caine : ...*
then said the Lord to Cain
MS. C 10: *God cwæð to him : ...*
God said to him
Latin: *dixitque ad eum ... (Vulgate)*

上の例を比較すると、B 写本では、副詞 *ða* が文頭の位置にあり、典型的な V2 構文であるのに対して、C 写本では、主語 Cain (4: 8–9), God (4: 10) が文頭の位置にある SV 語順である。⁽⁹⁾

Genesis 4. 15 も同様である.

- (27) MS. B 15: *Ða cwæð Drihten to Caine: Ne bið hit na swa,*
then said the Lord to Cain Not is it not at all so
MS. C 15: *God cwæð þa to him: Ne bið hit nateshwon swa,*
God said then to him Not is not at all so

Latin: dixitque ei Dominus nequaquam ita fiet ... (Vulgate)

4. 4 代名詞形主語と語順

B 写本では、定形動詞に先行する主語代名詞形 *he* が *and* に導かれる主節に起きる例がみられる。

- (28) MS. B 5. 8: 7 he forðferde þa he wæs nigonhundwintre 7 twelfwintre.
and he died when he was nine hundred years and twelve years

- (29) MS. B 5.14: 7 he forðferde, ða he wæs nigonhundwintre 7 tynwintre.
and he died when he was nine hundred years and ten years

これらは、節先頭の *and* が CP-Spec の位置にある談話操作子 (discourse operator) とみなせば、*he* が主語接辞である限り、節全体の語順を V2 として分析することができる。⁽¹⁰⁾

C 写本では、定形動詞に先行する主語代名詞形 *he* が文頭の位置にある例がみられる。

- (30) MS. C 5. 7: He lyfede seðen he gestrinde Enos .viii. hund geare 7 seofon
he lived after he begat Enos eight hundred years anf seven
gear,
years

- (31) MS. C 5.13: He lefede siððan he gestrinde Malaleel .viii. hund geara,
he lived after he begat Mahalaleel eight hundred years

(30), (31) では、*he* を主語接辞 (SCL) と解釈することはできない。
Biberauer & Roberts (2008) は、以下のような再分析が起きたと論じている。

- (32) a. $[_{CP} XP [_C SCL- [_C [_T V v T] C]] [_{TP} [_{vP} (SCL) ([_v V v]) (V v T)]]]] (vP)$
 b. $[_{CP} XP C [_{TP} SCL [_T [_v V v T]]]]] (vP)$
 (Biberauer & Roberts 2008, (22))

上の再分析がV2の消滅を起したと論じられている。同時に、SCLは完全な代名詞と変化する。C写本において、すでにheのSCLからの完全な代名詞化が進んでいたとみられる。

5 V2語順再説

先に見たV2語順の基本的分析では、V-to-T移動を経由して、T-to-C移動によって、V2語順が派生されると説明した。しかし、近年の分析では、ゲルマン諸語において、V-to-T移動を伴わず、V2語順が派生されると分析されている。

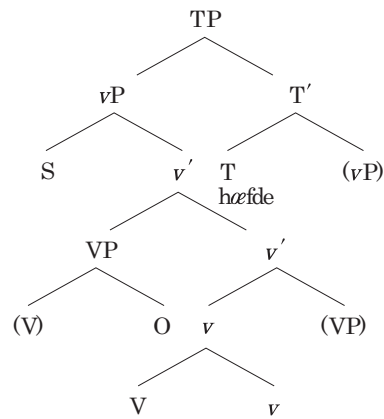
V2語順は主節の語順であり、無標の語順は従属節（または補文）の語順であるので、最近の古英語・初期中英語の分析を導入したい。

古英語の従属節では、現代ドイツ語と同様に時制を持った助動詞が文末に来る語順は標準的である。次の例は、SOVAux語順である。

- (33) *Ða se Wisdom þa þis fitte asungen hæfde ...*
 when the Wisdom then this poem sung had
 ‘When Wisdom had sung this poem ...’
 (Boethius 30.68.6; Biberauer & Roberts 2008, (7),
 Fischer et al. 2000: 143, 25)

この語順の派生のプロセスは省略するが、最終的にvPがTP指定部に移動することによって、次の構造が派生される。

(34)



(Biberauer & Roberts 2008, (7))

この構造から、さらに CP 内に vP が移動され、C に T 要素 *hæfde* が移動することを仮定すれば、V2 語順が派生される。⁽¹¹⁾

Biberauer & Roberts (2010) は、後期中英語には、以下の例のように、V-to-T 移動が見られるが、古英語や初期中英語では V-to-T 移動は無かったと論じている。

(35) a. My wyfe rose nott

(Biberauer & Roberts 2010, (23a), Mossé 1968, cited in Roberts 1985: 23)

b. Se ye not how his herte is endured . . . ?

see you not how his heart is hardened . . . ?

(Biberauer & Roberts 2010, (23b), Anon. The Examination of Master William Thorpe, 44, cited in Roberts 1993b: 239)

上例では、否定辞 *nott*, *not* の前に定形動詞があるので、これらは V-to-T 移動と考えざるを得ない。

Biberauer & Roberts (2010) は、後期中英語において主語が先頭である V2 語順が次に示すように再分析されて、V-to-T 移動が生まれたと論じている。

- (36) [CP DP [C V] [TP tDP [T tv] [vP tDP [v tv] VP]]]
 → [TP DP [T V] [vP tDP [v tv] VP]]

(Biberauer & Roberts 2010, (26))

したがって、Biberauer & Roberts (2010) の分析に従えば、古英語や初期
 中英語における V2 は V-to-T を伴わないと考えることが可能である。

C 写本では、定形動詞が否定辞に後続する例がある。

- (37) MS. C. 5.24. 7 he ne forðferde na, ac ferde mid Gode
 and not went (not) but went with God
 7 næs gesewen siððan mannum,
 and was not seen after man
 for þan þæ God hine genam.
 because the God him took

(37) では、多重否定 ne ... na と共に用いられた定形動詞 ferde は最初の否定
 辞 ne に後続している。したがって、C 写本においても、V-to-T 移動はまだ起
 きていないことが確認される。

6 V2 と等位接続

Müller (2004) は、等位接続された vP が、V2 の第一要素となる例をあげ
 ている。⁽¹²⁾

- (38) [Das Buch kann] und [den Aufsatz muss] [Maria lesen]
 the book_{acc} can and the article_{acc} must Maria_{nom} read
 (Müller 2004, (58a))

(38) では、最初の vP が先端の要素となるので、全体の第一要素として CP
 指定部の位置をとることになるが、and で始まる節の場合、and に先行する
 vP が空要素であるので、等位接続詞 and が先端要素として、CP 指定部の位

置をとると考えられる。

7 『古英語版七書』における等位接続詞 *and* を先頭とする主節

B 写本と C 写本の次の例を V2 の観点から検討してみよう。

(39) MS. B. 5.20 7 he forðferde, ða he wæs nigonhundwintre 7 fif 7 sixtigwintre.
and he went when he was ninety years and five and sixty
years.

(40) MS. C. 5.19 He leofede siððan he gestrinde Enohc .viii. hund geara 7
he lived after he begot Enoch 8 hundred year and
gestrinde suue 7 dohtra.
brgot sons and daughters

(39) と (40) はよく似た文脈であるが、V2 の観点から比較すると、対照的である。(39) では、*and* を第一要素とし、*he* を主語接辞 (subject clitic) とみなせば、V2 である。しかし、(40) においては、V2 であると仮定すれば、*he* は主語接辞ではない。また、C 写本には、次の完全な名詞が主語で、*and* を先頭とする主節の例がある。

(41) MS. C. 5. 22 7 Enoch ferde mid Gode. He leofode siððan he gestrinde
and Enoch went with God. He lived after he begot
Matusalam .iii hund geara 7 gestrynde sune 7
Methuselah 3 hundred year and begot sons and
dohtra.
daughters

(41) では、*Enoch* は完全な名詞形であるので、*ferde* は第二要素とはならな

い。したがって、(41)の最初の主節はV2ではないことが明らかである。⁽¹³⁾
 他方、B写本の(41)に対応する箇所は次の通りである。

(42) MS. B. 5.22 7 *syððan* he *gestrynde* *suna* 7 *dohtra*.
and after he begot sons and daughters

(42) では、もし、and *syððan* が一つの構成素となり、*gestrynde* の前の *he* が主語接辞であるなら、V2 とみなすことができる。⁽¹⁴⁾ したがって、B 写本の and 先頭の主節は V2 語順であると分析できるのに対して、C 写本の and 先頭の主節は V2 語順ではなく、(41) のような主節は SV 語順であると分析できる。したがって、B 写本の and 先頭の主節は *parataxis* 文体であるとみなせる一方で、C 写本のそのような構文は *parataxis* 文体の残存であると考えられる。⁽¹⁵⁾

8 結論

Kobayashi (2016) において、『古英語版七書』について次のような調査結果を示した。

表1. 『古英語版七書』におけるB写本とC写本におけるSV語順とV2語順

	MS. B			MS. C		
	SV	V2	SV/ SV+V2 (%)	SV	V2	SV/ SV+V2 (%)
GEN. 4	18	10	64.3	25	7	78.3
GEN. 5	8	1	88.9	17	1	94.4
Sum	26	11	70.2	42	8	84.0

表1において、B写本よりC写本の方がSV語順の比率が高い。このことは、C写本の語順が初期中英語として、後期古英語であるB写本よりも新しい段階であることを示している。この表では、andを先頭とする主節は除外している。しかし、本稿で論じたように、andを先頭とする主節は、V2とみな

すことができる例が B 写本で認められる。他方、共通する文脈を比較すると、C 写本では SV 語順であるとみなすことができるので、and を先頭とする例を除外しなくても、同様の結果が期待できる。

V2 語順は、アルフリッチ (Ælfric) による散文で標準的な語順であるが、parataxis 文体の and を先頭とする主節の場合、and を語順に含めるのかどうかという問題はあまり明確に論じられていなかったと思われる。本稿は、後期古英語と初期中英語における『古英語版七書』の写本を比較することを通して、アルフリッチの文体における and の扱いに関して V2 の観点から考察を行った。

謝辞 本研究は JSPS 科研費 23520588 の助成を受けたものである。

注

- (1) heowodum は与格であるので、直接目的語ではない。
- (2) Mitchel & Robinson は、従属節による複文構造を hypotaxis, parataxis を更に分類し、‘asyndetic’ と ‘syndetic’ とに分類する。現代英語では、以下のように例示される。

Hypotaxis: When I came, I saw. When I saw, I conquered.

Asyndetic Parataxis: I came. I saw. I conquered.

Syndetic Parataxis: I came and I saw and I conquered.

- (3) Wilder (1994) は、主部 and が次の節を補部とする根拠として、以下の例文を引用している。

a. John came. And Paul left.

b. *John came and. Paul left.

これは、Ross, J. (1967) Constraints on Variables in Syntax. Ph.D. MIT. による。

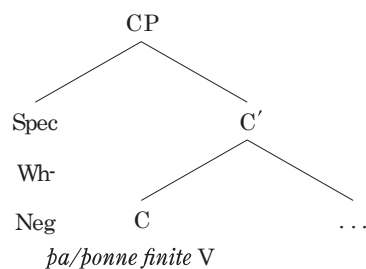
- (4) ここでは、この分析の基本的アイディアを示すに留めるが、再論する。
- (5) このような CP 指定部への移動としては、wh 移動が有名である。wh 移動も、

最大投射 XP の移動である点で、現代ドイツ語の V2 語順の定形動詞がそれだけで C へ移動する主要部移動であるのとは異なる。Radford (2004: 188–90) を参照されたい。

- (6) Ogawa (2000), Ogawa (2003) は、古英語説教文体における V1 構文について詳しく論じている。
- (7) 次のように、主語が名詞形であっても、動詞が第 2 番目の位置になるとは限らない。

(i) Witodlice Drihten astah nyðer to ðam ðæt he gesawe ða burh 7 ðone stypel ðe Adames bearm getimbrodon. (Gen. 11.5, MS.B)

- (8) van Kemenade, A. (1987), Haeberli, E. (2000), Biberauer & Roberts (2008) を参照。
- (9) C 写本における副詞 *þa* の位置は近代英語と異なる。動詞が副詞に先行する語順をとる理由は、統語論的には定形動詞 *cwæð* は TP にあると説明される。近代英語では、定形動詞は TP まで移動せずに、時制接辞を付加される。
- (10) V2 の統語構造を、van Kemenade & Los (2006) から引用する (再掲, (16))。



(van Kemenade & Los 2006, (3))

- (11) 現代ドイツにおける *vP* の CP への移動については、Müller (2004), (3) を参照されたい。
- (12) Müller (2004) は、次の例は右節点繰り上がり (right node raising) と再分析されるので、等位接続された *vP* の例としては決定的ではないと述べている。
 [Das Buch kann Fritz] und [den Aufsatz muss Maria] [lesen]
 the book_{Kacc} can Fritz_{nom} and the article_{acc} must Maria_{nom} read
 (Müller 2004, (58b))
- (13) なお、(41) の 2 番目の主節は、*he* が主語接辞であるなら、V1 語順となるので、既に代名詞形であるとみなす方が問題が少ない。
- (14) *and* は主要部として補部をとって、& 句を構成することができることをすでに

論じた。

- (15) Mitchell & Robinson (2007: 68) は、アルフリッチの文体について、ラテン散文の文体に影響されたことは疑いなく確かであると述べている。本稿も『古英語版七書』の文体がラテン散文の影響を受けていることを同様に認める立場である。

参考文献

- Biberauer, T. & I. Roberts (2005). Changing EPP-parameters in the history of English: accounting for variation and change. *English Language and Linguistics* 9, 1: 5–46.
- (2008). Cascading parametric changes: Internally driven change in Middle and Early English. In Eythórsson, Th. (ed.). *Grammatical Change and Linguistic Theory: The Rosendal Papers*. Amsterdam: Benjamins, 79–113.
- (2010). Subjects, tense and verb-movement. In Biberauer, T., A. Holmberg, I. Roberts, & M. Sheehan (2010), 263–302.
- Biberauer, T., A. Holmberg, I. Roberts, & M. Sheehan (2010). *Parametric Variation: Null Subjects in Minimalist Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: The MIT Press, 133–8.
- Crawford, S. J. (Rpt. 1969 of 1922). *The Old English Version of the Heptateuch—Ælfric's Treatise on the Old and New Testament and His Preface to Genesis*. *Early English Society Original Series No. 160*. London, New York, Toronto: Oxford University Press. Millwood, N.Y.: Kraus Print 1990.
- Fischer, O., A. van Kemenade, W. Koopman, & W. van der Wuff (2000). *The Syntax of Early English*. Cambridge: Cambridge University Press, 153–4.
- Haeberli, E. (2000). Adjuncts and the Syntax of Subjects in Old and Middle English. In Pintzuk, S, G. Tsoulas, and A. Warner (eds.). *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*. Oxford: Oxford University Press, 109–31.
- van Kemenade, A. (1987). *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*. Dordrecht: Foris, 204.
- van Kemenade, A. and B. Los (2006). Discourse Adverbs and Clausal Syntax in Old and Middle English. In Kemenade, A. van and B. Los (eds.). *The Handbook of the History of English*. Oxford: Blackwell Publishing, 224–48.
- Kobayashi, S. (2016). On V2 Word Order Change in Early Middle English. *The Journal of Seigakuin University* (『聖学院大学論叢』) 28–2, 1–14.

- Magennis, H. (2011). *The Cambridge Introduction to Anglo-Saxon Literature*. New York: Cambridge University Press, 16–132.
- Marsden, R. (1995). *The text of the Old Testament in Anglo-Saxon England*. Cambridge Studies in Anglo-Saxon England 15. Cambridge: Cambridge University Press. 395–443.
- Mitchel, B. & F. C. Robinson (2007). *A Guide to Old English*. Seventh Edition. Malden: MA (USA), Oxford (UK), Carlton (Australia): Blackwell Publishing, 68–9, 100.
- Müller, G. (2004). Verb-Second as VP-First. *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 7, 179–234.
- Ogawa, H. (2000). *Studies in the History of Old English Prose*. Tokyo: NAN'UN-DO Publishing Co. Ltd, 235–62.
- (2003). Subject-Verb Inversion in the Late Old English Prose: A Phase of the Development of Old English Prose. in Ito, T. (ed.) *Syntactic Theory: Lexicon and Syntax*. Tokyo: Tokyo University Press. (小川浩 (2003). 「後期古英語散文における文頭の主語・動詞の倒置——古英語散文史の一断面」, 伊藤たかね (編) 『文法理論——レキシコンと統語』, 東京: 東京大学出版会.)
- Ono, S. & T. Nakao. (1980) *The History of the English Language I*. English Linguistics Series 8. Tokyo: Taishukan. (小野茂・中尾俊夫『英語史 I』, 英語学大系 8. 東京: 大修館書店.)
- Radford, A. (2004). *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press, 188–90.
- Roberts, I. (2007). Introduction. In Roberts, I. (ed.). *Comparative Grammar*. Vol. V. *Critical Concepts in Linguistics*. Abington: UK, 1–12.
- Roberts, I. & A. Holmberg (2010). Introduction: Parameters in Minimalist Theory. In Biberauer, T., A. Holmberg, I. Roberts, & M. Sheehan (2010), 1–57.
- Ross, J. (1967). *Constraints on Variables in Syntax*. PhD, MIT.
- Wilder, C. (1994). Coordination, ATB and Ellipsis. In Zwart, J.-W. (ed.). *Minimalism and Kayne's Asymmetry Hypothesis*. Groningen, 291–331.